

第8期 第3回 静岡市行財政改革推進審議会 会議録

1. 日 時 平成30年11月15日(木) 10:00~12:00

2. 場 所 登呂博物館 1階登呂交流ホール

3. 出席者 【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田眞委員、内山和俊委員、  
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野真帆委員、杉山茂之委員、  
鈴木貴子委員、西尾眞治委員

【行政】

大石観光交流文化局次長、岡村文化財課長、矢澤参与兼文化振興課長、  
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、永田芹沢銈介美術館長、  
杉山駿河区長、草分駿河区役所地域総務課長、  
三宅総務局参与

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹、兵庫主査

4. 会議内容

- (1) 開 会
- (2) 歴史・文化資源の「保護」から「活用」へ(事務局説明)
- (3) 意見交換
- (4) 閉 会

審議会内容は以下の会議録のとおり

田形和幸会長：次第に沿って議事を進める。前回、市長からの諮問を受けた後に登呂エリアを視察し、みなさん様々な印象を抱かれたことと思う。今回は、諮問のサブテーマにもなっている「登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策」の検討に向け、登呂エリアの「目指すべき姿」をある程度具体化し、委員同士で共有したい。まず、審議に先立ち、歴史・文化資源に対する考え方について事務局から説明をお願いしたい。

《略：資料1により事務局説明》

田形和幸会長：ただいまの説明について質問や意見はあるか。続いて、次第3の意見交換に移る。事前に各委員からご回答いただいた、視察を通して感じた登呂エリアの優れている点、改善すべき点について、事務局からまとめて説明してほしい。

〈略：資料2により事務局説明〉

田形和幸会長：ただいま紹介のあった皆さんの意見を簡単にまとめると、登呂エリアの活性化のためにはこれまでにない新たな発想を取り入れることが必要だと言えるのではない。特に「稼げる施設」にするためには、民間の発想は非常に重要だ。本日は、民間の力による地域活性化に実績のある小島委員から発表いただけるということで、これをきっかけとして皆さんとの意見交換に入りたい。それでは小島委員お願いします。

小島孝仁委員：私見ではあるが参考になればと思い少し意見を述べさせていただきます。前回の視察の後に2度ほどここに足を運んだ。社員も連れて来てどう感じるか聞いてみたが、市内、県内出身の社員は一度は来たことがあるがほとんどが10年から30年前であり、最近は来たことがないと言う。駐車場に車を停めて、博物館に歩いて行くが、最初に見えるのが民間のアパートなどでなかなか高揚感が高まらないという意見があった。私は不動産が本業だから、その土地をどうすれば一番活かせて、収益を上げることができるかを常に考えている。この特別な、民間ではなかなか作ることができないような登呂遺跡全体をどのように活かすべきかという視点で考えた。土地、建物を活かす上で景観というものが非常に重要性を増してきている。最初に見える風景が、竪穴式住居よりもその後ろの高層住宅の方が目立っているのは非常に残念で、これを県外の人や海外の人に見せるのは恥ずかしいという厳しい意見も聞かれた。これをどう隠すかだが、手前に植樹するのが一番効果的だと思う。こうすることで森を抜けたところに竪穴式住居があるのではないかというようなイメージを作ることができる。若い方は写真をSNSに投稿するが、植樹すればこの辺の角度からであれば十分に竪穴式住居を主張できるような写真が撮れるのではないか。反対側の北側から見た風景については、こちらはだいたいぶすっきりして見える。ただ、博物館が手前側の風景とそぐわないから、ここにも植樹をすると、博物館が隠れて一番メインの住居だけが浮かび上がってくる。住宅街や高層建築を樹木で隠すことにより、復元住居や水田のある景色をよく見せることができる。最初にこうしたことから取り組むのがいいのではないか。現況でも芹沢美術館寄りの植林されている場所からは周りの建物が見えなくなって、だいたい違和感が軽減されている場所がある。植林で周りの風景を隠して、復元住居がよく見える場所に、ゆっくりと風景として楽しんでいただけるカフェを作れば、観光で一日の中でいろいろと動くルートの中で、住居を見ながらここでお茶をしようとし寄り寄る観光客が増えるのではないか。地元も市民の方もカフェがあれば誰かとここで待ち合わせようとか、おしゃべりしようとか、日常的に使える。こういう風景が見えるカフェは非常に価値があると思う。こういったものを作れば施設として稼ぐこと

ができるのではないか。実際に世界には、史跡などの歴史的空間をうまく見せて、カフェやレストランで十分収益を上げている場所がある。保護してきた施設を稼げる施設に変えるということでは、いかにそれを見せて景観としての価値を上げて、入場料以外の別の所で稼ぐという発想が重要ではないかと思う。カフェと言ってもただコーヒーを飲ませればよいというものではなく、高揚感を高める、旅のモチベーションを下げないためのデザインに優れたカフェ空間が重要だ。ミュージアムショップも、もう少し販売するための空間に変えれば売り上げも変わってくるのではないか。いま、飲食店にしても物販店にしても、売上を上げるために空間作りには非常に力を入れている。博物館にせっかく来ていただいた方に満足して帰っていただけるように、こういったショップ自体もただ商品を置いておくだけでなく、買い物の高揚感を与えるような場所であることが必要だ。

田形和幸会長：いまご説明いただいた内容についてご意見等があればお伺いしたい。

小泉祐一郎委員：確かに登呂博物館の建て替えの前は木がたくさん植わっていた。私の実家がこの近くにあり、先日の視察の後に近所に聞き取りをしたのだが、以前はたくさん木が植えてあり、森の中を歩いていくと弥生時代の遺跡が見えてくるような、一種のミステリーゾーンのような感覚だったと聞いた。植栽は大変だと思うが、小島委員がおっしゃったように一つの景観対策として、昔のように周りに木を植える、また植える木についても弥生時代の当時の歴史をうまく生かすような方法がいいのではないか。気になるのが、どこまでを登呂エリアとするのかだ。観光振興的な要素まで考えると、この敷地の中だけではなく、隣接する周辺まで含めた形でどうやって経済効果を出すかが重要だ。博物館だけで稼ぐのは限度があり、市の税収まで波及するという点で考えると、施設の中もちろんだが、小島委員のおっしゃったようにカフェとか、むしろ周りの民間の企業と合わせた経済効果が重要だと思う。学生を連れて富山のスターバックスに行った。藤枝の蓮華寺公園のスターバックスは2号店であり、富山はその本家本元だ。いろいろと調べたが、実は駐車場が重要だ。無料の駐車場がないとなかなか使われない。民間の立地を促すという場合に駐車場との関係をどうするかということを考えないと、なかなか民間を立地を誘導できない。だからと言って、単純に無料にすればいいと申し上げているわけではない。一等地の北側のやよい茶屋、南側の皇太子もお買い物になったやよい茶屋、やまだいちさんの放火で焼けた建物も更地になっている。周りにまだ、もともと観光施設として設置したところもあるので、そういうところも含めて活用を図れたらよいと考える。

鈴木貴子委員：昨日、南米のエクアドルから静岡を訪れて来た男女1名ずつ、駿府城公園を見た後にセノバで待ち合わせをして、その後どこに行きたいかと尋ねたら、登呂に行きたいと言った。セノバからバスは出ていなので、一緒に静岡駅まで歩いて行き、南口で一緒にバス停を探した。私も分からなくて観光案内所で聞いてバスに乗ったのだが、外国人の方だけではなかなかそこまでたどり着けないと思う。なんとか登呂遺跡までたどり着き、バスを降りたら遺跡の復元が見えて、彼らはすごく感動していた。火おこし体験も新鮮だったようで満足していた。博物館の3階に行って富士山が見えると喜び、1階の展示を見て、オーディオガイドの無料貸し出しを利用した。1階のスタッフの方々もとても親切だ

った。帰り際に彼らに、駿府城公園と登呂のどちらを人に勧めるかと訊いたら登呂と答えた。それだけ外国の方にも登呂遺跡と博物館は関心のある場所だということが分かった。一つの理由は火おこし体験だ。南米にもインカ帝国という古い文明があるが、その体験はなかなかできないと言う。1階の施設を見たときは、自分たちのインカの文明に似ていて、現在でも先住民族がこういう機織りをしている、それをここ静岡でも昔やっていたのだということで共感を持ってくれた。ただ、残念なことに、若干英語の表記はあるが、ホームページや重点的なところには英語の案内がない。無料のオーディオガイドは英語があったので、彼らは聞いていたが、なかなか案内がマッチしていなかった。そういうところがインバウンドの集客の機会を失っていると感じた。閉館時間が4時半ということで、最後は大急ぎで帰ることになったが、彼女たちはグラフィックデザイナーであり、隣に芹沢美術館があることを伝えると行きたがった。しかし時間がなくて行けなかった。芹沢美術館とここの登呂の施設がうまくリンクしていないのではないか。彼らはホームページで登呂遺跡のことを偶然知り、一人が日本語を勉強していたので、何とか日本語とグーグルを使いながら翻訳をして登呂博物館のことは分かった。しかし残念ながら芹沢美術館のことは分からず、残念ながら行く機会を失ってしまった。もう一点、昨日は2時間以上登呂で時間を過ごしたが、外国の方は興味を持てば2時間以上そこで過ごすことが分かった。芹沢美術館にも関心を持てば、ほぼ1日中過ごせるのだ。そうすると、次に何が問題になるか。それは飲食のスペースだと思う。3階の富士山が見えるスペースでお茶などが飲めてもいいのではないか。そういった工夫も検討していただけるといい。

杉山茂之委員：以前は植樹されていたが、それがなくなると聞いた。何か背景があるのか。

文化財課長：登呂遺跡の登呂遺跡たるところは、住居と水田が一体になっているところだ。

昔、木を植えていたのは田んぼの部分だ。それが、集落から水田が一度に見られるという弥生時代の環境に復元するというので、特に水田にあった部分の木を大きく切った。それが、たくさんあった木が減った一つの理由だ。もう一つは、再整備を行った際に、この登呂博物館を作ったということもあるが、地下の水道（みずみち）が大きく変わった。すると、残してあった木が根腐れを起こしてたくさん枯れてしまった。それから、登呂遺跡公園の縁辺には遊歩道が一周しており、遊歩道の公園側に樹木を植えて周囲から遮蔽しようとしていたが、植えた樹木が育たなかった。小泉委員がおっしゃっていたが、弥生時代に存在した広葉樹木を復元しようとしたが、今の登呂の地下水位の高さに合わない木が出てきて、未だにうまく育っていない。樹木が減った理由には、切ったことと、枯れた、育たなかったということがある。小島委員のご説明にあった植樹については、登呂博物館の前に「学びの広場」がある。ここはどういう水田があったか分からないところで、いろいろなイベントなどを行うエリアにしようということで残した。ここに植樹をしていくことは可能だと思う。ただ、せっかく植えたが枯れてしまうことがある。大きな樺を残したが、上があまり伸びなくて、葉が少し付いているだけ、枝も枯れ落ちてくるというひどい状況だ。さらに高植えをするなどの何らかの工夫をしなければならない部分もある。もう一つ、私たちが再整備をしている途中に高層建築が建ち始めた。バス停との間

に坂になっている部分があるが、そこに大きくなる木を植えて少しでも景観を見直そうと努力をしているが、まだそこまで育っていない。

杉山茂之委員：そうすると、北側は隠せるのか。東側が隠せないということか。

文化財課長：そうだ。

小泉祐一郎委員：登呂エリアは昔に比べて地下水位そのものが上がっている。博物館のせいだけではない。

文化財課長：この博物館を作る時に、地下から水がすごく出てくるので遮蔽の基礎をしてしまった。それが、この広場の樫が枯れた原因ではないかと考えている。

田形和幸会長：しずおか信用金庫は登呂に支店があるが、そこが水に浸かってしまったことがある。建て直す時に調べたら、この地域自体が水が出る地域だったようだ。

小泉祐一郎委員：一説には登呂の語源はアイヌ語で「たまり」という意味だと聞く。だからこそ水田に適していたわけだが。

杉山茂之委員：北側を隠せればある程度は…。

小島孝仁委員：植樹提案エリアと記しているが、北側を隠すためには近いところに植樹しないと高いものは隠せない。手前側の植林の隙間から見える風景では、復元住居の上のスペースが少し見えてしまうので、それを隠すためには北側に植えた方がいい。いかに隠すかというのが重要だ。少し話が逸れるが、登呂博物館のコストについて、年間の歳入が13,436千円で、それに対して歳出が130,694千円ということだ。歳入の10倍程度の歳出となっている。そこで何が活かせるのかという視点で考えると、新しくカフェを作り、その飲食の収入とミュージアムショップの物販、それから宿泊の3本柱になると思う。久能海岸沿いに民間が経営しているカフェがあるが、その売上は月に1千万円程度と聞く。たかが一軒のカフェがこちらの年間の歳入と同じ位の売り上げを一か月間で上げてしまう。そのカフェは何が特徴かということ、目の前に海があり、波が動いているということで、人を引きつけ、地元の方々が日常的に使っている。カフェは何が見えるかということに価値があるから、そういう意味でもカフェが一つの収益の柱になる。カフェで引きつけて、日常的に来る人がミュージアムショップで何かを買うかといえば買わないと思うが、観光客は買う。観光客をカフェで引きつけて、ミュージアムショップでお金を落としてもらう。それから宿泊体験、宿泊施設だ。特徴のある宿泊施設にはわざわざ海外からも足を運んで訪れて来る。遠くの海外から人が来て、それをSNSで地球の裏側まで情報を飛ばしてもらう。宿泊施設も非常に効果があるのではないか。登呂博物館のブランディングということだと思う。ブランディングとは相手に好きになってもらうということだ。どう見せるかは大事だ。人に好きになってもらいたいと思うなら、服装はきちんと整えていくと思う。パジャマのまま行くということはない。来ていただいた方にどう思っていたか、これは最初の入り口としては非常に重要なことだ。

内山和俊委員：先日の新聞記事を見ていると、まちみがきセッションを開いて、駿河区長と大学生とで意見交換を行ったということだ。そこでどのような意見が出たのかお伺いしたい。

駿河区役所地域総務課長：区長とのまちみがきセッションは、区民意見の徴収事業として毎年実施しているものだが、今回は大学生をターゲットに意見交換をした。初回到駿河区を4つのエリアに分けて、フィールドワークということで学生の方にタクシーでエリアを回っていただいた。その中に登呂博物館、登呂遺跡を見ていただいたチームがある。用宗エリアや丸子の方、区内もいろいろと見ていただいた。その中で、一つのチームの提案が、登呂遺跡で文化祭を実施するというものだ。歴史と地域資源を掛け合わせて情報発信をしていきたいということで、その場として登呂遺跡を使い、学生が文化祭的にフェスをやったりお店を出したりしてそこを盛り上げていきたいという内容だった。学生の中には県外から来ている方も、地元の方もいる。地域について新しい発見があり、意外と自分が知らなかったことがたくさんあったという意見があった。登呂遺跡に来てミュージアム全体や周辺、景観、展示物といろいろと見ていただいたが、再発見したものを新たに自分たちの目線で発信していくことを考えていただいた。

内山和俊委員：来年度、事業化されると新聞に出ている。登呂博物館ではいろいろなことをされていると思うが、それらと一体的にやる必要があるのではないか。

駿河区役所地域総務課長：新聞で報道していただいた内容は、今回提案いただいた粗（あら）のものだ。これから学生と一緒に企画を詰めていくところだ。6つのグループから6つの提案をいただいたが、その一つが登呂遺跡を活用する内容だ。先日、登呂博物館に今後の情報交換と協力についてお願いをし、一緒にやっていこうと話をした。

田形和幸会長：ここで10分間休憩とする。

#### 《休憩》

田形和幸会長：再開する。小泉委員は県の職員時代に文化行政に携わっていらっしやったことから、何かご意見をいただきたい。

小泉祐一郎委員：県立美術館などを所管する課にいたが、なかなか文化施設だけで稼ぐのは大変だ。文化施設の魅力を高めることは当然なのだが、周りの民間の力をいかに使うか。県や市は稼ぐという時に、最後は固定資産税や税金でいただいているわけだから、民間の方に周りで頑張ってもらって、税収で戻ってくる、そういう形で施設の魅力を考えることが必要なのではないか。それから、観光ルートについてだが、車で回る場合の観光ルートを検討する必要があるし、駿府浪漫バスに乗るといった話もあったが、そういった自然めぐりの観光ルートという視点も必要だと思う。

坂野真帆委員：今日は駐車場に車を置いて来たが、本当の登呂遺跡の入り口はどこなのか分からなかった。遊歩道のようなものがあるが、普通の道路を歩いてここまで来たという印象だ。駐車場を降りてから、登呂遺跡に入ったという意識がないままに博物館にたどり着いたという感じがした。先ほど観光交流文化局の方の話では、水田と復元住居と一緒にあることが価値だとおっしゃったが、その価値を全く感じないままに博物館に入ってきた。登呂遺跡が発掘されたときの日本中の喜びとか、そういうエモーショナルな部分、こ

こが日本人が文化的な生活をするようになる水耕栽培の始まりなのだと感じないまま2階に行く。2階だけ有料だと言われると、ここがどういう所なのかよく分からないで来て、1階が図書館と遊びのエリアのようなものを見ただけで、上の階への期待もないから、知らない人はそのまま出て行ってしまわないか。かえってフィールドと1階があることによって、2階に上がって有料展示場に入っていく機会が減っているのではないかという気さえする。これだけのものがありながらバラバラに見えてしまうのが問題ではないか。水田跡地がとても重要なものだということが分かるような表示だけでもいい。目隠しだけでなく、囲いのようなものでここが登呂遺跡だときちんと示すことは、すぐにできることではないかと思う。さらに、芹沢美術館が同じ敷地内にあるが、なぜそういうことになったのか分からないが、こちらとあちらの客層は全く違うと思う。登呂遺跡を目指して来た方は芹沢美術館にあまり関心がなく、芹沢美術館に来た方は登呂遺跡には寄らずに帰るということがあると思う。個人的に芹沢美術館が好きということもあるが、知名度が低いと説明があったが、民芸ファンにとっては芹沢美術館は世界からでも目指して来たい美術館だと思う。それと登呂博物館がうまくリンクするようなセンスが必要で、トーンが揃っていればこちらにも寄れる。もう少しアーティスティックな博物館になればいいと感じる。芹沢美術館で良い作品を観た後には、気持ちを共有したり余韻に浸りたいと思うものだ。この前の視察の際に、子ども向けのワークショップをやる場所がなくて中庭や屋外でやっているという話を聞いて、これは何とかしなければならぬと感じた。エリア一体を同じようなトーンで括るという作業をしていく、プロデュースやブランディングの話があったが、両方のプロデュースをエリアで一体的にやるのがいいのではないか。もう一つは、公共の施設、特に教育施設については民間側の利用に対してすごく制限があると思うので、規制緩和があるとよい。民間の方が入って何かをやるにしても参加料が300円とか500円と言われると、民間ではなかなかいいものできない。シズオカカンヌウィークのシズカンマルシェがここ何年か広場でやれるようになった。大学生から企画提案があったということだが、そのような何かしらアーティスティックなセンスのものを定期的にやっていくことも必要ではないか。ぜひ規制緩和のところも検討いただきたい。

鈴木貴子委員：昨日ここに来た時、博物館の2階に入ろうと思ったが、その前にまず1階を見て、その後に富士山を見ようと思って3階に行った。私たちの予定では、1階の後に3階に行き、そのまま降りて入場料を買って2階の展示物を見ようと思った。しかし2階ではチケットが買えなかったため、1階までまた降りてチケットを買い、すごく煩雑だった。普通であれば、もういいと言って諦めて帰っていく人はけっこういると思う。3階で富士山を見て何となく階段で降りてきて、2階の有料展示を見ていこうと思う人は結構いると思う。そこで1階まで降りてまた2階に上がるという煩雑なことをさせるのは勿体ない。逆に、販売機があるからこそ、1階も3階も有料施設だと思って、1階も3階も行かないということにもなりかねない。有料のものがあって、その入場券を買わせるのであれば、しかるべきところでチケットを購入してもらった方がいいのではないか。

田形和幸会長：先ほど坂野委員から入り口が分からないという意見があったが、入り口でチケットを売ることも必要かもしれない。そうすれば一体感がでる。それから、やはり動線が大事だ。入って、出てくるまで、全部見てもらいたいならば動線で誘導するのが分かりやすい。

西尾真治委員：私くらいの世代だと登呂遺跡はものすごく絶対的なブランドイメージがある。ただ、今の歴史の教科書から外れてきているということもあり、若い人にとっては登呂遺跡はあまりブランドとして定着していないということも認識しておく必要がある。登呂遺跡というブランドに安住するということではだめで、新たにブランドイメージを作っていくという観点を持つておく必要がある。一つ可能性として思うのは、体験型、参加型に非常に可能性があるのではないかと。先ほどエクアドルの方が火おこしの体験が非常に心に響いたという話があった。弥生の生活、古代の生活が体験できる。先ほどカフェで風景を見るという時も、遺跡を見るというだけだとインパクトが弱い。そこで、子どもたちも含めて弥生の生活を体験している姿と一緒に眺めることができるということになると、一つ付加価値になるのではないかと。最近はいろいろなイベントも行われていると聞いた。ミュージックビデオの撮影ロケにも使われたと聞く。私も歩いている時に場の力のようなものがあると感じた。場の力を積極的に生かして、イベントなどに活路を見出していくのも手だ。一つの特徴でもあり課題でもあるが、まちなかにあるということが特徴だと思う。まち全体で一つの博物館というような考え方もできるのではないかと。まちは劇場というキーワードがあるが、この博物館のエリアの中だけではなく、まちも含めて一体的にブランドイメージを作っていくこともできればいいのではないかと。宿泊施設の話もあったが、そこに民泊も絡めていくとか、まち全体での盛り上げ方も考えられる。

植田真委員：私が小学生の頃、学校の校庭に竪穴式住居を作り、野菜なども作って、一泊した経験がある。それが非常に面白くて、いまでもよく思い出す。いまの建屋に泊まるのは難しいと思うが、テントなど何かしらの方法で泊まれるような住居を作ったら子供たちに非常にインパクトを与え、良い体験になるのではないかと。そこでキャンプファイヤーができればなお良い。古代の米や野菜も食べられる、そういう体験が非常に重要ではないかと思う。別の観点になるが、私も芹沢銈介の作品を買ったりするのだが、なぜここに芹沢美術館を作ったのか、その理由が分かれば教えていただきたい。うまくマッチングできるような施設を他にも作れるのではないかと。芹沢美術館そのものが非常に良い美術館で、建物も素晴らしい。館内が暗くて、そうしないと作品が劣化するということだが、もう少し建屋をうまく見せることができればいい。暗さは他に何かに活かせるのではないかと。

田形和幸会長：なぜここに芹沢美術館があるのか、どなたか説明できるか。

事務局：次回までの宿題にさせてほしい。なぜここに芹沢美術館があり、芹沢銈介の家があるのか。その経緯を確認しておく。

田形和幸会長：芹沢美術館は市の持ち物なのか。

内山和俊委員：芹沢銈介の遺族の方が、いろいろな収蔵品を静岡市に寄贈された。その中で博物館を作ることになり、他に場所がなくてここに建てたと聞いている。遺族の方

からの強い要望があったということだ。

田形和幸会長：静岡の人は芹沢さんをよく知っている。世界からも訪れるという話があったが、これまではそういう認識がなかった。そうであれば、県外の方々に芹沢さんの魅力をもっとアピールできればいいのだが。

坂野真帆委員：倉敷の大原美術館を見た後に芹沢美術館を見ると、こちらの家の路地から入って見るという点でも余韻というものが違うと感じる。体験型観光、歴史観光がすごく言われているが、歴史観光について言えば、水田で行われていたことを誰も見たことがない。それが復元だと言われても誰も分からない。結局のところは妄想やイメージを膨らませることが復元に繋がるのだと思う。それがないと歴史観光はとてつまらない。本当は何年だったとか、これは違うとか、兎角論争する部分があるが、ある意味どちらでも良くて、今ある情景や聞いた話から自分はこう思う、自分はこう想像するということが非常に重要だ。そして、そういうことに繋がるような体験が必要だ。もちろん火を起すこともいいと思うし、自分たちで田植えをすることもいいと思うが、体験そのものに人気がある、無いという話ではなく、この体験によって何がイメージされるのか、どのように感じるのかというのが一番大切だと思う。そこを想起させるような体験でないとダメだというのが持論だ。今の状況を批判するのではないが、そこができていないのか。いくら相手が子供だとしても、そこは大事にすべきではないか。そうしないと、先ほど話にもあったように、30年前に訪れたきり、ということになってしまう。

田形和幸会長：前回の視察の時に幼稚園児が稲刈りをしていた。あれはどういう経緯か。

登呂博物館長：幼稚園で田んぼを借りていただいている。春に田植えをして秋に稲刈りをしている。それから、一区画が2.5メートル四方の市民水田というのがあり、年間3,000円で利用いただいて、苗を育てるところから始めて脱穀までしている。今は大体25区画くらい利用されている。

岩井泰次郎委員：登呂のブランディングの話があったが、軸をぶらさないことが大切だ。静岡市は何をもって外に売っていくかというときに、結局は桜えびあたりが切り口になる。他にないという現状がある。登呂に関しては、もっと突き進んで、例えばここではみな貫頭衣を着ているとか、ここに来たらみな貫頭衣に着替えなければならないとか、そのくらい突き進んでいく。弥生といえば登呂というようなブランディングをして、軸をぶらさずに外に発信していくことが必要ではないか。

小泉祐一郎委員：坂野委員がおっしゃたように、歴史のロマンを感じさせることが必要だ。博物館の中の展示は学術的な裏打ちや正確性が必要だが、駐車場や観光施設的なところでは、まんがやイラストで登呂の物語が分かりやすいように簡単に紹介する。ロマンの世界でやる。北側にガイダンス施設があり、1階にまんがで登呂の物語の展示をされている。発掘にいたったストーリー、登呂のすごさやロマンを小学生でもわかるような形で伝えていくとか、駐車場を出て最初の導入部分にはもっと簡単にロマンを感じさせるような設定が必要ではないか。博物館に入って最初の水田跡のところの表示は正確性を旨としていて、あまり物語にはならない。昔は住居の前に登呂遺跡の時代の絵があったが、いま

はイメージさせる絵もない。正確性などの問題もあるのだろうが、駐車場のところには掲げられるのではないか。東名高速から静岡市に入ると、登呂遺跡のマークが見える。これからスマートインターができるが、高速から降りた方を登呂遺跡に誘導する仕組みが必要ではないか。

杉山茂之委員：インバウンドがこれからますます増えていく。出張で新幹線に乗る機会が多いが、本当に外国人の方が多い。ほとんどが東京から大阪や京都に行かれる。できれば静岡で降りてほしい。結婚式の仕事をしているが、いま集客の手段はほとんどインスタだ。インスタでいかに拡散して、いかに良い連鎖をたくさんしていけるかが重要だ。そういう意味ではカフェや宿泊施設を含めたブランディングについては、口コミに繋がるような仕掛けが必要だ。ブランディングにおいては、どこにターゲットを置き、どういう形で拡散していくかを考えながら設計する。いまは良いものを作っても売れない時代だ。いかにお客様が飛びつくもの、それを情報として他に伝えていきたいと思うものを作らないと難しい。そういう視点でもう一度検討を進めていく必要がある。

田形和幸会長：もう一度、どういう方を集客させるのか、リピーターなのか、その検討が必要だと思う。静岡空港ができたが、空港を降りてそのまま静岡に滞在するかというと、山梨や東京に行ってしまうと聞く。静岡は魅力がないのかと思ってしまうが、県外の方はいろいろあるではないかと言ってくれる。やはりアピールの仕方が足りないと感じる。小学生は遠足でここに来るのか。市内から来るのか。

登呂博物館長：6年生の教科書で紹介されていることもあり、だいたい市内では約8割の学校から見学に来ていただいている。

田形和幸会長：その子供たちが大きくなって、県外に出て行ったときに、静岡にはこういう資産があるということアピールできていないのではないかと思う。私たちも地場産業に対して力を入れているつもりではあるが、衰退してしまうのは、やはりアピールが足りないからだと感じている。

内山和俊委員：久能山東照宮の方が、静岡には徳川家康や今川義元など有名人がたくさんいるが、そのPRが足りないと、静岡のPRの必要性を言われていた。それから、地域全体で良くなることをしてもらいたい、地域のことをもっと学校で教えてほしい、そうすると郷土愛が芽生えて、子供たちが大きくなって大学を卒業した後、また静岡に戻って来るということを言われていた。

田形和幸会長：民間の力をもっと借りてもいいのではないか。民間も社会貢献としてお金を出すことはやぶさかではないと思う。行政の中のお金だけでなく、カフェにしても民間に委託してそこで稼いでいただき、市は賃料で（収入を得る）、そういう形でもいいのではないか。駐車場についても、周辺に協力いただき、貸してもらうこともやぶさかではないと思う。お金をお支払する、しないは別にしても、おそらく嫌だとは言わないのではないか。管理上の問題だけだと思う。意見も尽きないと思うが、ここで一旦区切らせていただき、事務局より次回以降の日程と予定について説明をお願いしたい。

〈略：事務局説明〉

田形和幸会長：行政の方で何か話をしておくことがあればお願いしたい。

観光交流文化局次長：貴重なご意見をいただいた。いくつか大きなテーマがあり、景観づくり、空間づくりという中では、最初に植樹の話があった。できることから市として対応していきたい。そうした中で、動線の話、区画の話、景観と空間づくりが重要であり、それと共に民活の話もあった。カフェやレストラン、物販、宿泊施設、これらはなかなか市だけではできないこともあるが、いろいろなイメージを描いていくことは、ブランドを作っていくうえで重要だ。あとは、交通対策やバスの話も出た。外国人のインバウンド対策ということで、市全体ではインバウンドはまだ1割程度の宿泊者数でそれほど多くはないが、今後増えていくことも想定される。それから最後に、弱いと言われている情報発信、アピールについても対応していかなければならない。市が抱えている課題について総合的にご意見をいただいたと思っている。これをしっかりまとめて、我々も対応策を検討していきたい。

事務局：休憩時間にお配りしたコミュニティマップについて紹介してほしい。

駿河区長：いまご紹介したコミュニティマップは、24ページに登呂遺跡が掲載されている。

駿河区全般を皆さんに知らせるためのマップなのでぜひご利用いただきたい。先ほど説明した区長とのまちみがきセッションによる学生の企画については、来年度の実現にあたって登呂遺跡とも協力して進めていくことになっている。

鈴木貴子委員：昨日観光協会に立ち寄った時に、公益財団法人するが企画観光局が出している2018年度おもてなしクーポンというものをもらった。静岡市立美術館や県立美術館は載っていたが、登呂博物館と芹沢美術館は載っていなかった。割引率は高くなくても、ここに載ればクーポンにも載るし、地図にも載る。静岡市に立ち寄った方がどこに行こうかとこれを見る時に、このエリアが載っていないのは残念だ。ここに水産漁港課が作ったシズマエをアピールするグッズがあるが、同じようにトロベージュグッズなどがあると活躍するのではないか。

田形和幸会長：その他に意見等がなければ、本日の審議会は終了とする。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸

